

大学博物館の設立に向けて

稲村哲也¹⁾、近藤智嗣²⁾、鶴見英成³⁾、牧野由佳⁴⁾、五藤素直⁵⁾

Toward the Establishment of the University Museum

Tetsuya INAMURA, Tomotsugu KONDO, Eisei TSURUMI, Yuka MAKINO, Sunao GOTO

要 旨

筆者の稲村は、アンデス文明に関する展示会を秋田、福島、神奈川、鹿児島、大分で、各学習センターの協力を得て開催し、他の筆者もそれに協力してきた。これらの活動を通じて、筆者は放送大学と博物館の連携に大きなメリットを見出した。そこで、2018年3月の評議会で放送大学博物館設立と学芸員資格の授与のための博物館実習の設置を提案し、賛同を得た。2018年度に大学執行部での議論で博物館設置の方向性が示され、2019年度、学習教育戦略研究所のプロジェクト「放送大学博物館構想・博物館実習構想のための基礎的研究」を実施した。その結果、学内に、展示スペース、古い放送機材や実験機材などの資源があることが判明した。そして、既存施設を活用することにより、費用をかけずに設立することが可能であり、大学の教育と発展のための効果が極めて大きいことも明らかとなった。そこで、2020年度に、放送博物館の具体的なイメージを提示するため、実例としての「モデル展示」の設営を行った。その展示は2021年6月までに約70%が完了し、2021年度に、再度、学習教育戦略研究所の研究として採択され、完成に向けて作業を続けた。本稿では、展示の設営作業の過程について報告し、その記録を残すとともに、博物館の意義、コンセプト、展示の概要について述べる。

ABSTRACT

The author Inamura held exhibitions on the Andean Civilization in five prefectures—Akita, Fukushima, Kanagawa, Kagoshima, and Oita—with the cooperation of the Study Center in each place, and the others helped the projects. Through the experience of the exhibitions, the author discovered much merit in the cooperation between the university and museums. Thus, the author proposed the establishment of a museum in our university in addition to the museum curatorship training course, in March 2018. The executives were in general agreement on the plan. Then, the author conducted out basic research in 2019 for the museum's establishment as a project by the Institute for Strategic Studies in Learning and Education, finding out the resources required, such as a space for exhibitions, old equipment for broadcast, and laboratory instruments, among other things. Utilizing the available resources, the museum could be established without incurring any cost. Subsequently, its tremendous impact on education and university development can be expected. In 2020, to present a concrete image of the Museum of our university, a “model exhibition” was set up as an actual example. This exhibit was 70% complete by June 2021. In 2021, the exhibition project was again selected as a research project by the Institute for Strategic Studies in Learning and Education, and we continued to work toward its completion. This article reports the process of setting up the exhibit, and describes the significance of the museum, its concept, and an overview of the exhibition.

1 はじめに

1996年の学術審議会発表「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）—学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について」を契機として、全国の主要大学で「大学博物館」の整備が進められてき

た。現在では、大学博物館は、学術標本等の保存・活用、研究の可視化、継続性の担保、大学アイデンティティの形成、教育への活用等の機能を担い、デジタル・データの集積・発信の役割も含め、大学にとって不可欠のものとなっている（稲村2016b）。学内においては、学術標本などの保存・整理と継続的な利用に資するだけでなく、専門的分野間を繋ぐ研究と教育の

¹⁾ 放送大学特任教授

²⁾ 放送大学副学長

³⁾ 東京大学助教（東京大学総合研究博物館所属）、2022年4月より放送大学准教授

⁴⁾ 総合大学院大学博士課程院生（国立歴史民俗博物館）

⁵⁾ 放送大学「人間と文化コース」学生、国立歴史民俗博物館ボランティア、元日刊工業新聞記者

拠点、さらに外部資金による共同研究の拠点などとして重要である。また、今日の大学博物館は、教育研究に資するだけでなく、研究成果の社会への発信、多様な交流の場として、社会にとっても大きな役割を果たしている。研究成果を社会に広く公開することは、知的財産を社会全体で共有し、とくに次世代に多様な知的関心を喚起するために有効である。

放送大学の場合、一般の大学以上のメリットがあると言える。まずは、展示のスペースとして既存の施設が再利用できること、さらに、かつて使用されていた貴重な撮影・編集機材、放送機材をはじめ、自然系学術標本・実験器具、民族資料等の実物資料があり、資料収集の費用も必要としないことである。博物館設立によって、大学アイデンティティを可視化・具体化して内外に示し、教育と広報の素材を拡充し、大学の総合力を強化することができる。また、実習体制を整備すれば、将来的に学芸員資格を直接授与できるようになる。さらに、デジタル・アーカイブとの連動により、映像データ、デジタル・データの集積・保存・活用も可能となる。

2020年度、学習教育戦略研究所の「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」として、試行的に、放送大学博物館の実際の常設展のモデル展示の設営を試みた。基本的な方針としては、既存スペース（PRIME室）を再利用し、市販の展示パネル（パーティション）等を使用し、工事を伴わずにモデル展示を設営することとした。それにより、具体的な博物館像を明示し、博物館設立に向け、将来的に最大限のメリットを引き出す活用・運用方法等をも検証することができると考えた。

本稿では、これまでのアウトリーチ活動（展示会の開催）の概要、モデル展示設営の記録を残すとともに、博物館の意義、コンセプト、展示の概要を整理し、報告する。

2 「古代アンデス文明と日本人」展示活動からの学び

2-1 日本人によるアンデス考古学研究のきっかけ

第一筆者（以下、筆者）がアウトリーチ展示の活動を始めるきっかけになったのは、2014年に制作した特別講義『古代アンデス文明と日本人』であったが、その特別講義を制作したそもそもの背景から述べておきたい（詳細は本誌33号：稲村ほか2016aで報告）。放送大学博物館の構想とも間接的なかわりがあるからである。

東大におけるアンデス研究の始まりを作ったのは天野芳太郎という秋田出身のペルー移住者であった。天野は関東大震災後の横浜で事業を興して成功し、海外雄飛を目指して南米に渡り、各国で一国一事業を展開

して実業家として大成功を収めた（小池1998）。しかし、太平洋戦争ですべてを没収されて日本に強制送還された（天野1983）。戦後まもなく南米に戻り、興味を抱いていた古代史に魅せられ、ペルーの砂漠で自ら土器や織物の発掘までして収集・研究にのめり込んだ。

天野芳太郎は1935年にマチュピチュ遺跡を踏査している。1911年にこの遺跡を「発見」した米人学者ハイラム・ビンガムの本を読んですぐ現地に飛んだ。天野は、クスコから軽便鉄道に乗り、マチュピチュの麓の駅で降り、駅前の宿に入った。その宿の主人が福島からの移民でマチュピチュ村の村長になった野内与吉であった（福中1940、野内・稲村2017）。天野は野内の案内で一週間ほどマチュピチュ遺跡を踏査した（尾塩1984）。それが、天野がアンデス研究にのめりこみきっかけとなった。

戦前、京城大学に在籍して文化人類学研究に従事していた泉靖一は、敗戦後、博多に引き上げたのち、1951年東京大学助教授に就任した。1957年、日系人社会の調査のため赴いたブラジルからの帰途、泉はリマに寄って天野芳太郎に出会った。泉は、天野にアンデス文明の魅力と研究の可能性を教えられ、研究の開始を決断した⁶⁾。

翌1958年、（東京大学の文化人類学教室の創始者であった）石田英一郎を団長とする多分野の調査団がペルーに派遣された。続いて、1960年、泉靖一団長のもと東京大学アンデス考古学調査団が組織され、ペルー中部アンデスのワヌコ県のコトシュ遺跡で発掘が開始された。この発掘で、それまでアンデス文明の始まりとされていたチャビン・デ・ワンタル神殿を1000年以上さかのぼる「交差した手の神殿」が見つかり、紀元前2千年期の無土器時代に高度な神殿造営技術があったことが証明された（大貫・加藤・関2010）。それが天野と泉の出会いから始まったのである。

さらに、大貫団長の代になって、調査団はペルー北部山地のクントウル・ワシ遺跡等で発掘調査を行い、出土した装身具類は、米大陸最古（紀元前800年）の黄金製品として、世界を驚かせた。それをきっかけに現地にクントウル・ワシ博物館が設立された（大貫1992）。現在、調査団は発展的解消をなした形だが、調査団出身の研究者がそれぞれ独立して、ペルー各地で大きな成果をあげている。

戦後リマに戻って漁業会社を経営していた天野を、1969年南米経済視察の折に製網業で成功した実業家の森下精一が訪問した。天野は、東大調査団をサポートしながら、アンデス文明の研究と遺物の収集を進め、1964年にはリマに考古学の博物館「天野博物館」を設立していた。天野と出会った森下は、感激のあまり座り込んでしまったという。そして、自らも地元岡山に森下美術館（現・BIZEN中南米美術館）を創立した

⁶⁾ 泉は学生時代から終戦まで、朝鮮半島から中国にかけて、東北アジアの先住民社会の調査をしていた。以前のフィールドに戻ることができず、研究の方向に迷っていた泉がこのときに天野に出会った。

(森下精一伝編纂委員会1980)。

2-2 特別講義『古代アンデス文明と日本人』とアウトリーチ展示会開催

筆者が制作した特別講義「古代アンデス文明と日本人」は2015年から放映が始まった。この講義では、上述した4人のキー・パーソンの3代目にあたる、大貫良夫氏、阪根博氏(リマ市在住)、野内セサル氏、森下矢須之氏の4名にスタジオに集合していただいた。大貫良夫氏は東大による発掘調査の三代目リーダー、阪根博氏は天野芳太郎の孫、野内セサル氏は野内与吉の孫、森下矢須之氏は森下精一の孫である。特別講義では、この4名の「三代目」の座談によって、アンデス文明の魅力とそれが日本人の手で研究されてきた経緯について紐解いた。

この特別講義は、アンデス文明の特徴と魅力を解りやすく紹介し、日本人によるアンデス研究の契機と実績を示すと共に、感動的な「出会い」を取り上げた。講義の終盤に、このコンセプトを展示として具現化した最初の事例が紹介された。東京大学総合研究博物館の分館のひとつ「JPタワー学術文化総合ミュージアム・インターメディアテク」における「黄金郷を彷徨う—アンデス考古学の半世紀」展である(2015年1月24日～6月21日)。

東京大学で展示を開催する案は当初、大貫良夫氏と共に検討し、総合研究博物館に提案した。そして、西野嘉章館長(当時)の賛同を受け、助教の鶴見英成(本稿共著者)が総指揮となって特別展示を計画することになった。「踏み込めば抜け出せなくなる黄金郷、それが古代アンデスである。本展はアンデス美術の名品や学術標本を一堂に集め、不帰の客となった彼らの物語と、これまで半世紀あまりにおよぶ日本人による考古学的貢献、そして今後の展望を紹介する」(西野・鶴見編2015:10)という趣旨のもと、日本語とスペイン語による解説と図録出版、連続講演会の開催など、大学博物館としての成果発信が鶴見によって企画された。

会場にはマチュピチュの巨大な写真(タテ3m×ヨコ10m)を設置し、その前にペルーの天野博物館から借用した天野芳太郎の遺品と野内与吉の遺品を並べ、「マチュピチュでの出会い」が演出された。さらに森下精一のBIZEN中南米美術館、泉靖一の東京大学、両者の収蔵する考古資料が研究成果とともに示されたのである。

続いて、これまで秋田、福島、横浜、鹿児島、大分の各地で、各学習センターと協働して展示会を開催してきた。その内容については本誌のバックナンバーで紹介してきた(本誌33号:稲村ほか2016a、本誌34号:野内・稲村2017、本誌38号:稲村2021)。これら展示会開催の過程において、筆者は、博物館との連携が放送大学にとって極めて有用であることを確信した。また、「手作り博物館」のノウハウを蓄積し、業者に頼らず、最小限の設置経費で博物館を設立する方

法を習得してきた。そこで、以下では、アウトリーチ展示会で学んだことなどをまとめておきたい。なお、これらの展示会の開催は、中日映画社(株)等の協賛と学長裁量経費を得て実現することができた。

2-3 5回のアウトリーチ展示会

次の展示会は天野芳太郎の生地である秋田で放送大学と秋田魁新報社が主催した(2015年6月28日～7月20日)。タイトルは「アンデスに魅せられた男天野芳太郎」で、会場は、故佐藤典氏の尽力により、秋田魁新報社のさきがけホールを使用することができた。秋田魁新報社が主催に入ったことで、新聞やテレビで何度も報道された。また、ポスター制作にも秋田魁新報社の協力を得た。その基本デザインは、以後の展示会でも活かすことができた。

秋田の会場ホールはおよそ200平米の広さで、壁に絵画などを吊るすレールの設備はあったが、それ以外に展示のための備品(展示台、展示ケースなど)はなかった。入場と同時に全体が見渡せる開放的な展示とし、展示ゾーンとしては、「天野芳太郎の足跡」「古代アンデス文明」「マチュピチュ空間(巨大写真と民族衣装試着撮影コーナー)」と大まかに区分したが、ゾーンの仕切りは設けなかった。「古代アンデス文明」については、土器、黄金装身具(東大調査団の発掘品のレプリカ)、織物の3コーナーに分けた。

展示ケースは、秋田県立博物館のご好意により行灯型ケース13点を借用し、これに土器類を納めた。不足のケースは、宝飾用ケースとタワー・ケース計13点を地元の業者からリースし、黄金装飾品レプリカなどを展示した。織物の展示は壁面を使った。

壁面スペースが広いが、そこには、天野芳太郎、東大調査団の発掘、野内与吉、森下精一の写真と解説パネルを設置した。さらに、展示の目玉として、マチュピチュ巨大写真を壁面に吊るし、その前で民族衣装を着て記念写真を撮れるようなスペースを作った。また、ショップと放送大学PRのコーナーも設けた。ショップでは、収蔵品を無償で提供していただいたBIZEN中南米美術館のミュージアム・ショップの物品などを販売した。

展示の解説パネルなどは、すべて手作りで用意しなければならなかった。放送大学「人間と文化コース」の大型プリンターで写真や解説を印刷し、ハレパネ(市販の接着剤付きの発泡スチロール製パネル)でパネルを制作した。

展示会の問題のひとつは人手であったが、放送大学秋田学習センターの井上浩所長(当時)の尽力により、学生さんたちにボランティアとして参加していただいた。マチュピチュ写真の脇に民族衣装の無料試着コーナーを設け、ボランティアに、衣装の試着やショップの手伝いを、展示の監視も兼ねて担当していただいた。このゾーンは、展示場内に来館者同士、また来館者とボランティアの交流の場を形成した。それは、来館者に大いに楽しんでいただけるだけでなく、放送

大学のボランティアのみなさんの熱意のこもった説明によって、大いに放送大学のPRにつながった。このシステムは、以後の展示会でも踏襲した。

第2回目は、放送大学に加え、(野内与吉氏の孫の野内セサル良郎氏が設立した)日本マチュピチュ協会、福島民報の主催により、二本松市市民交流センター(福島県二本松市)で開催した(2016年8月7日～8月28日)。福島県は野内与吉の生地であるため、タイトルを「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」とした。この展示会は、野内与吉の渡航から100年を記念し、また、マチュピチュ村と大玉村の友好協定が締結されたことも記念して実施することになった。

二本松市市民交流センターは多目的イベント会場で、(秋田と同様に)展示ケース等が全く用意されていなかったため、(秋田での方式を踏襲し)福島県立博物館に赴いて直接お願いし、使用していない展示ケースを借用させていただいた。また、会場の両サイドが明るい大きな窓の構造となっているため、展示空間を作るためには、パーティション・パネルを設置することが不可欠であった。そこで、可動式のパネル数十枚を地元の業者からリースした。あらかじめ、会場のゾーニングのプランを作成し、それに従って業者に組み立ててもらった。

ゾーニングは比較的単純な開放型のものとした。まずは導入部を「野内与吉」ゾーンとし、そこを抜けると「古代アンデス文明」の展示があり、その奥に巨大マチュピチュ写真が見える構成とした(写真1)。この会場は、秋田より広かったため、BIZEN中南米美術館所蔵の約30点の土器、織物に加え、ミイラ頭骨を展示した。さらに、野外民族博物館リトルワールド所蔵の現代の伝統的な民具(農具、土器、織機、楽器など)も展示した。リトルワールドのこれらの民族資料は、以前、筆者(稲村)が現地で収集したものである(筆者は1978年から81年までペルー・アンデスで現地調査に従事し、帰国後に6年半リトルワールドに研究員として従事し、博物館開設に携わった)。

展示会場では、野内セサル良郎氏の父セサル・ノウチ・モラレス(野内与吉の息子)がアコーディオンの

演奏を行い、大いに観客を沸かせた。また、友好協定締結を記念して、ペルーからマチュピチュ村村長一行の計9名が大玉村を訪問すると共に、展示会のオープニング・セレモニーに参加した。この式典には、ペルー大使館のマリオ・ブスタマンテ参事官、大玉村の押山利一村長、放送大学の宮本みち子副学長、福島民報の高橋雅行社長ほかが参加した。ここでも、福島民報社が主催に入ったことで、新聞やテレビで大きく報道された。

この展示会でも、放送大学の学生ボランティアの皆さんが、民族衣装の試着の手伝いなどとして活躍し、期間中に来館者と交流し、大いに放送大学のPRにも努めていただいた(写真2)。

以上の2回の展示会開催の経験は、設営に苦勞したが、その後の展示会の準備と運営の基本となった。次は、横浜みなと博物館の企画展示場で、放送大学と日本マチュピチュ協会の主催による「マチュピチュの出会いと古代アンデス文明」展を開催した(2016年12月3日～12月25日)。当時神奈川学習センターの所長を務めておられた池田龍彦前副学長の強力なサポートを得て実現した。

この展示会は、天野芳太郎が中南米に雄飛する前に、横浜の馬車道で事業を展開していたことなど、天野に縁の深い地であることが契機となった。都市部の公立(横浜市立)の博物館であるがゆえの制約(展示場内での活動、搬入・搬出の時間や経路、広報の方式など)も多く、その点も学んだことのひとつである。この展示会では、展示期間中、BIZEN中南米美術館の森下矢須之館長にギャラリー・トークや音楽イベントを実施していただいた。ギャラリー・トークでは、エクアドルの笛付き土偶(約3000年前)の笛の音の鑑賞が人気を博し、以後の展示会でもこれを実践した。期間中にペルー大使ご一家が来場した。この展示会については、読売新聞社、朝日新聞社、神奈川新聞社に記事が掲載された。

次に、放送大学鹿児島学習センターと(公益財団法人)鹿児島県国際交流協会の主催による「マチュピチュと古代アンデス文明」展を「かごしま県民交流セン



写真1 福島での展示の設営



写真2 展示会場のマチュピチュ巨大写真前での民族衣装試着・撮影

ター」6階ギャラリーで開催した(2017年9月9日～10月1日)。これは、学習センターの菅沼俊彦所長(当時)の尽力により開催に漕ぎつけた。会場は、立派なギャラリーで、壁付ケースやパーティションの設備も整っていた。博物館ではないため、展示の設営はすべて自前で行う必要があったが、学習センターの事務の方々、ボランティアの方々の協力で、3日間の準備作業でなんとか間に合った。この時の準備作業の過程については、本誌38号(稲村2021)で詳しく報告している。期間中に講演会を4回実施し、ギャラリー・トークも6回実施した。森下館長によるトークでは、横浜と同様に笛付き土偶・土器の実演が人気を博した。展示会と会期中のイベントは、朝日新聞、毎日新聞、南日本新聞などで紹介された。

最後に、放送大学大分学習センター、大分県立歴史博物館、宇佐市の共同主催により、大分県立歴史博物館(宇佐市)の企画展示室で「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」展を開催した(2018年7月21日～9月9日)。この展示会の詳細も本誌38号で報告した。

大分県立歴史博物館は、「宇佐風土記の丘」の史跡指定を受けている宇佐市の川部・高森古墳群の中にある立派な博物館である。ここでは、宇佐市西椎屋地区の「秋葉様(火伏せの神)」が「宇佐のマチュピチュ」と呼ばれる特殊な景観を有していることや、アーチ式石橋、磨崖仏、古い神仏習合の信仰などを含め、本場のマチュピチュ遺跡との共通性が開催の契機となった。本展示は、そうした背景のもとに、大分学習センターの前田明所長(当時)の熱意と働きかけにより、地方自治体(宇佐市)の国際交流企画、県立の博物館の企画展示とを結びつけた、画期的な共同事業という位置づけとなった。

大分県立歴史博物館の企画展示室はかなり広く、壁つき展示ケースのスペースも大きいため、これまでの展示会のなかでも、規模も期間も最大のものとなった。BIZEN中南米美術館の約100点にのぼる土器、織物等の資料、野外民族博物館リトルワールドの民族資料約100点、東大アンデス調査団が発掘したコトシュ遺跡の「交差した手」のレプリカ、クントゥル・ワシ遺跡から出土した黄金の装飾品のレプリカ、また、野内与吉氏の遺品である手作りの工具、天野芳太郎氏の遺品である自筆手紙、古代裂なども展示した。

期間中は、ここでも、マチュピチュ巨大写真前での民族衣装の試着・撮影を常時行った。これは公立の博物館としては、初めての試みということであった。さらに、アンデス民族音楽「folklore」演奏会、ギャラリー・トークも実施した。

大分での展示会は博物館の企画展示の位置づけとなったため、学芸員の協力を得て設営を行い、専門の業者も携わったため、展示のクオリティは大いに高まった。同博物館には、この展示会の共同開催をきっかけに、「博物館資料保存論」等の科目制作でもたいへんお世話になった。

2-4 展示会開催におけるメリット

以上の展示会の開催の経験から確信したメリットの重要なポイントを以下に列記しておきたい。

- ・アウトリーチ展示会の開催において、地元の博物館との連携は極めて重要であった。いずれの会場においても、展示ケースの借用等でお世話になった。この背景には、展示の意義を理解していただいたこと、放送大学への敬意もあったと感じた。こうした連携を活性化していくことは、放送大学の可能性の拡大に繋がると確信した。
- ・いずれにおいても、開催期間中に、講演会、音楽イベント、ギャラリー・トークなどを実施したが、それは直接的な参加者へのPRと共に、報道機関の関心を引き重要なPRの機会となった。
- ・展示会での学生ボランティアの活動は、やりがいのある課外活動のひとつとなり、大きな教育効果もあった。
- ・マチュピチュ巨大写真の前での民族衣装の試着と記念写真撮影のイベントは毎日実施したが、そこが来場者と放送大学の学生ボランティアとの交流の場となり、自然と放送大学のPRの効果を持った。
- ・展示会は広く一般の方々に放送大学について知っていただく機会となったが、特に、展示会の来館者は教養を求める層であり、PR効率が高いと思われた。
- ・放送大学と博物館の連携は、今後、多くの可能性を持っている。とくに、「友の会」メンバーは、放送大学の教育との親和性が高く、学生募集の効果も大きいと思われる。

3 放送大学での展示論講座(日本展示学会)の開催

3-1 展示論講座

日本展示学会は、展示の考え方として、展示自体が「総合的なコミュニケーション・メディア」であるという視点に立ち、1982年に初代会長の梅棹忠夫らによって設立された学術研究団体である。2011年度からは、大学における博物館学芸員養成課程の科目改訂を見据えた「博物館展示論対策講座」を開催し、2013年度からは「展示論講座—博物館の展示」と名称を改め、東京国立博物館、京都国立博物館、国立民族学博物館を会場とした講座を実施してきた。

これまでの会場が国立の博物館であったが、本稿共著者の近藤智嗣が同学会の理事ということもあり、2019年度は、学会と放送大学の共催として、放送大学で開催した。2020年度も引き続き放送大学の共催としたが、新型コロナの影響によりオンライン形式となった。

3-2 放送大学での開催(2019年度)

2019年度の展示論講座は、2019年9月13日、14日、15日の3日間で行った。募集定員は50名であったがキャンセル待ちが出るほどで、当日3名欠席があり参加

者は47名であった。講座の内容は、60分9コマの講義とワークショップで構成された。講義は、「(1) グレートジャーニーの特別展(科博): 関野吉晴・稲村哲也」(写真3)、「(2) 展示とデザイン: 木村浩」, 「(3) 展示づくりのプロセス: 河石勇」, 「(4) グラフィックをつくる: 齊藤克己・杉谷進」, 「(5) 展示照明を知る: 藤原工」, 「(6) 生態展示・生息環境展示と構造的展示: 若生謙二」, 「(7) 展示のメッセージ性・政治性: 稲村哲也」, 「(8) 訪日観光客の増加を次の成長の機会にするためには: 山名尚志」, 「(9) 展示評価: 近藤智嗣/展示に情報デザイン: 伏見清香」がテーマであった。

ワークショップは、180分を2回と120分を1回の時間をかけて「放送大学博物館をつくろう」をテーマとしたグループ・ワークショップを行った。このワークショップでは、本稿の「モデル展示」と同じ設置場所を想定して、放送大学博物館の展示をプランニングし、平面図上に立体模型を制作することが課題であった(写真4)。

放送大学のイメージを掴むために、ワークショップに先立って大学内のスタジオや放送設備の施設見学を実施した(巻末カラー①)。施設見学で放送大学への理解を深めた後に、各グループメンバーで、展示では



写真3 関野吉晴氏との「グレートジャーニー」対談



写真4 展示論講座での展示の模型作成

放送大学をどのような切り口から伝えたいか(展示のテーマやコンセプト)を議論し、展示物の選定や展示構成を組み立てていった。たとえばあるグループは、「開かれた大学～放送大学の魅力と革命～」と題し、展示をとおして観覧者に、(1)放送大学では幅広い世代が全国各地で学べることを伝える、(2)放送技術の進化を伝えることを目的として、展示室の構成を考えた。その他、各グループが独自の視点から大学の魅力を伝えようと工夫を凝らしていた。課題の発表は、放送大学内の映像スタジオから中継するという放送大学らしい演出とした。

ワークショップを通じて、受講生たちは展示技術を学ぶとともに、放送大学の仕組みや歴史にも触れ、本学への理解を深めることができたと考える。後日実施したアンケート結果によると、本講座について非常に満足が61%、やや満足が31%を占めており、受講生の評価は高かった。

3-3 放送大学での開催(2020年度)

2020年度の展示論講座は、新型コロナの影響により、例年のように会場に参加者を集める開催が困難な状況であったが、本講座を継続させるためにオンラインによる開催とし、2021年1月23日(土)・24日(日)の2日間で実施した。テーマは、コロナ禍における実践的な内容とするため「展示論講座—Withコロナの展示を考えよう」とした。参加者は、1日目が約260名、2日目が約240名であった。配信は放送大学のスタジオにスタッフ5名が集まり、講師の4名は遠隔参加でつなぐ形式で実施した。講義内容は、「(1) Withコロナから考える展示の近未来: 真鍋真」(写真5)、「(2) 水族館の現場から: 野口文隆」, 「(3) 科学館の現場から: 高尾戸美・廣澤公太郎」, 「(4) 体験学習の現場から: 西澤真樹子・北村美香」であった。例年の本講座は50名程度の参加者であったが、予想を大きく上回る参加者数となり、アクセスが容易なオンラインの可能性が示された結果となった。後日実施したアンケート結果では、4つのいずれの講義も80%以上の満足度で受講生の評価は高かった。



写真5 オンラインによる展示論講座科博の展示の解説(真鍋真氏)

このように、これまでは国立の博物館が会場であった日本展示学会展示論講座を放送大学内で共催として実施できたことは、今後の博物館構想および博物館実習の布石になったと言えるだろう。

4 放送大学博物館設置に向けたモデル展示の構想と準備

4-1 これまでの活動

2017年度末の評議会において、筆者（稲村）が「大学博物館設置・学芸員資格授与」構想について提案し、前向きな評価を得た。2018年度、執行部において本件が議論され、その準備を進めることが基本的に了承された。

それを踏まえ、2019年度の学習教育戦略研究所による課題研究「放送大学博物館構想・『博物館実習』構想のための基礎的研究」を実施した。それにより、学内に点在している放送関連機材、理系の実験機材など、博物館の収蔵資料となりうるモノの確認・リスト作成、博物館のコンセプト・基本設計等を進めてきた。その結果、学内には「大学博物館」の収蔵・展示にふさわしい多くの資料が散在していることが明らかとなった。

さらに2020年度の学習教育戦略研究所による課題研究「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」により、モデル展示の構想、展示の実践を行った。新型コロナウイルス感染症流行により一部を2021年度に繰り越したが、2021年6月までに約70%を推進することができた。それによって、放送大学博物館設置の可能性が大きく開かれた。

2021年6月には、岩永新学長及び3副学長がモデル

展示を視察された（巻末カラー②）。また、8月には土生木事務局長と事務方2名がモデル展示を視察し、今後の課題等について協議を行った。

以上の経過を踏まえ、2021年度に学習教育戦略研究所による課題研究「モデル展示制作による大学博物館の展示方法の開発と研究」を提案して採択され、モデル展示の完成に向けて、2021年10月以降、作業を続けてきたところである。

4-2 展示の基本コンセプトとゾーニング

放送大学のPRIME室には、プレゼン用の「展示スペース」があり、その再活用を前提として展示を構想した。このスペースには、円形のテーブル、パーティションなどが設置されていたため、2019年度の段階では、それらを活用することを考慮して、展示の基本ゾーニングを行った。すなわち、展示の基本コンセプトと、それに基づく展示ゾーンして「放送大学の歴史」と「放送大学の研究・教育」の二つを基本とするというものであった（図1）。

しかし、2020年度に、モデル展示を具体化する過程において、「放送大学の歴史」「放送大学の教育・研究」の二つだけでは、放送大学の紹介の基本要素は満たされるものの、博物館展示としての魅力に欠けると思われた。

そのような展示コンセプトを実現するためには、より自由な展示ゾーニングが不可欠である。そこで、展示スペースの不要な部分を撤去することにした。ただし、壁際のパーティションと中央の「隔壁部分」は、天井の照明用レール・システムを支える構造になっていたため、そのまま残すことにした。それによって、ベースとなる空間が決まった（写真6）。

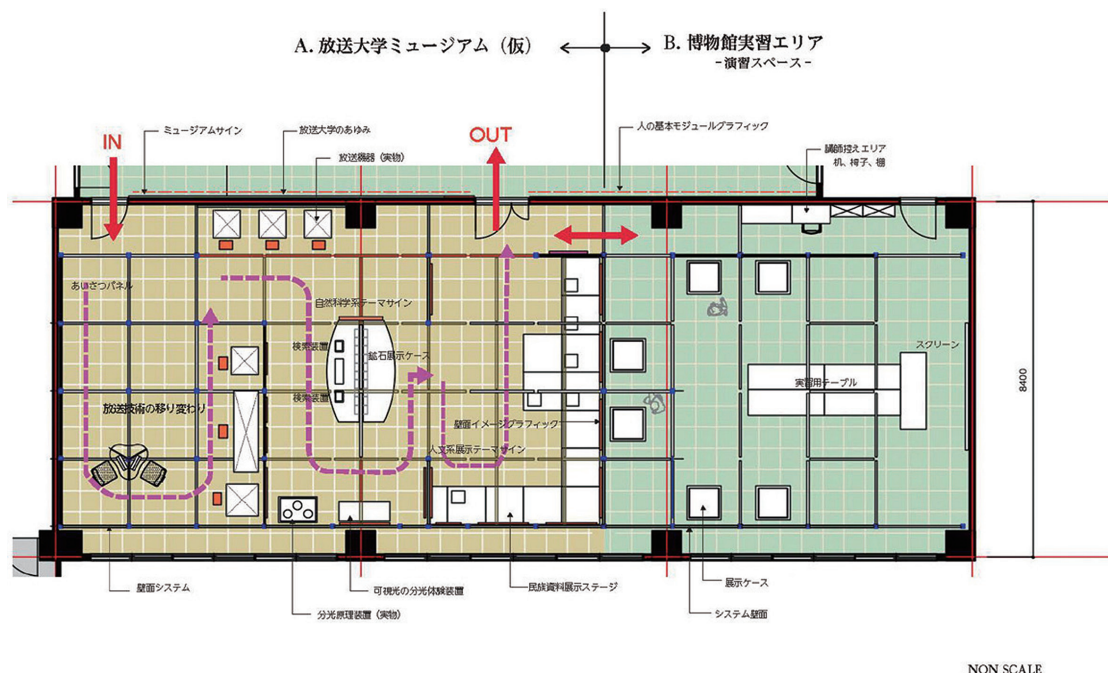


図1 モデル展示の当初のゾーニング（2019年度）：作成 高山敦



写真6 初期状態の展示スペース

4-3 3つの展示ゾーン

先に述べたように、放送大学の特色を生かしながら、魅力的なストーリー性をもった展示も必要であろうと考えた。それが、放送大学の研究・教育の中心である「教養」の象徴的な展示として構想した「地球・人類のあゆみと多様性」であった。結局、放送大学博物館の常設展示としては、以下の3ゾーンの構成とした(図2)。

- ・展示ゾーンⅠ「放送大学のあゆみ」
- ・展示ゾーンⅡ「地球・人類のあゆみと多様性」
- ・展示ゾーンⅢ「放送大学の研究・教育」

■展示ゾーンⅠ「放送大学のあゆみ」

この展示ゾーンは、放送大学の特徴を最もよく表す基本の部分である。2019年度の活動で、本学に相当の数の重要な資料があることが明らかになった。それが、博物館設立の可能性を大きく引き出すものであった。すなわち、いわゆる「ハコモノ」と呼ばれる施設

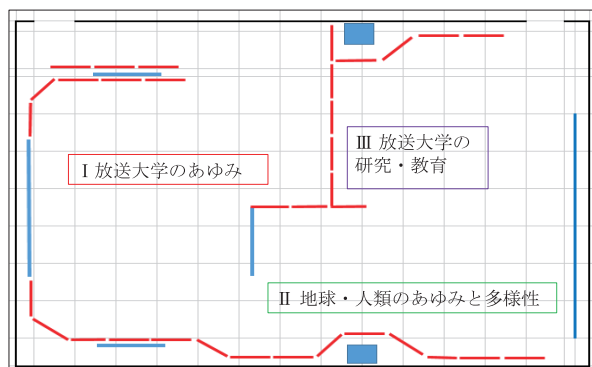


図2 新たなゾーニング (2020年度)：
作成 稲村哲也

と、そこに展示する基本的な資料が、すでに放送大学には存在しているということであった。あとはそれらをどのように生かすかである。それが、2020年度における学習教育戦略研究所の研究実践の主要目的でもあった。このゾーンは、当初は以下のような展示コーナーによって構成することを構想した。

- ・放送大学の歴史
- ・地上波放送関連機材
- ・撮影機材
- ・編集機材

■展示ゾーンⅡ「地球・人類のあゆみと多様性」

この展示ゾーンの構想は、放送大学「キャンパスex」の番組として企画された『大統合自然史』に触発されたものである。この番組の制作は、外部からの提案を受け、学内では岸根順一郎教授が企画提案者となり、岸根教授、安池智一教授、魚住孝至教授と筆者が出演者に加わった。そのコンセプトは「最先端の研究者と放送大学の自然科学系・人文系の研究者が協力し、『大統合自然史～宇宙・生命・人類～』として分かりやすく展開する」というものである。時間軸としては、宇宙創成から人類社会が直面する現代の危機までを捉え、そこから未来を展望するものであり、共進化という視点を打ち出すことで、いわゆるビッグヒストリーとは異なる「大統合自然史」を放送大学から発信することを目指した。第一部は「物質から生物へ」を中心に構成し、続けて「人類」に重点を置いた第2部を展開することを想定した。

「教養」の神髄ともいえる、このような総合的な知の発信を放送大学が担うことは大いに意義深いことであろう。それを博物館としても展示で表現できないものだろうか考えた。それが展示ゾーン2「地球・人類のあゆみと多様性」の構想の出発点であった。

この展示ゾーンを実現するための資料としては、それまでに学内で確認していた、自然と環境コースが所蔵する「鉱物と化石のコレクション」、筆者が所蔵する民族資料のコレクション等があった。民族資料の多くは、「愛・地球博」(2005年の愛知万博)の展示品である⁷⁾。

■展示ゾーンⅢ「放送大学の研究・教育」

この展示ゾーンは放送大学の6コースの研究教育の一部を紹介するものである。これは各コースの先生方と相談しながら、展示資料を提供していただき、コンセプトと内容を構想した。

⁷⁾ 当時、万博会場に隣接する愛知県立大学に勤務していたことや中部人類学談話会(日本文化人類学会中部支部を兼ねる)の会長であったことなどにより、万博終了後にいくつかの参加国からの寄贈を受けた。それらの民族資料は、一部は野外民族博物館リトルワールドに収蔵・展示され、一部は愛知県立大学における博物館実習の展示資料として活用した。

5 展示設営の実践プロセス

5-1 ゾーニング・展示コーナーとパーティション

展示のゾーンとその中のコーナーが決まり、展示物も大まかに決まると、展示の設営に入るが、そのためには展示台や展示ケースが必要となる。博物館の企画展の場合、壁付ケースや行灯型ケース、また壁付ケース内に展示物に合わせて展示するための大小の展示台が所蔵されており、それらを使って展示を組み立てることになる。また、新たな博物館を作る場合は、展示業者が請け負い、学芸員と協議しながら展示設計を作出して、それに従って展示スペースを施工していく。

放送大学の「モデル展示」では、およそ9m×12mの空間で、その一部に（構造上）残した隔壁を考慮しながら、ゾーニングをする必要があった。展示物とその意味付けなど、いろいろと検討しながら、展示コーナーを想定し、図面を作成した（図3）。市販の高さ240cm幅90cmのパーティション・パネルがちょうどうまくおさまりそうであった。コストの点でも最も適切であることがわかり、これを30枚余り発注し、業者に組み立ててもらった（写真7）。

パーティションの設営が完成すると、3つのゾーンの各コーナーの展示が可能となった。各コーナーの展示のためには、展示台と展示ケースが必要である。その多くは市販のものから選定した。ここで、たいへん幸運な出来事があった。詳しくは後述するが、淡路島にあった「兼高かおる旅の資料館」が2020年に閉館となったため、そこで使用していたガラス・ケースを、

「兼高かおる基金」から提供していただいたことである。このガラス・ケースは、四方から展示物を見ることが出来るいわゆる「行灯型」で、展示には欠かせないが、新規注文では1台数十万円程度の高価なものである。

以下に、各展示ゾーンの展示の概要と、各コーナーの展示の設営作業の手順について報告する。



写真7 パーティションの設営

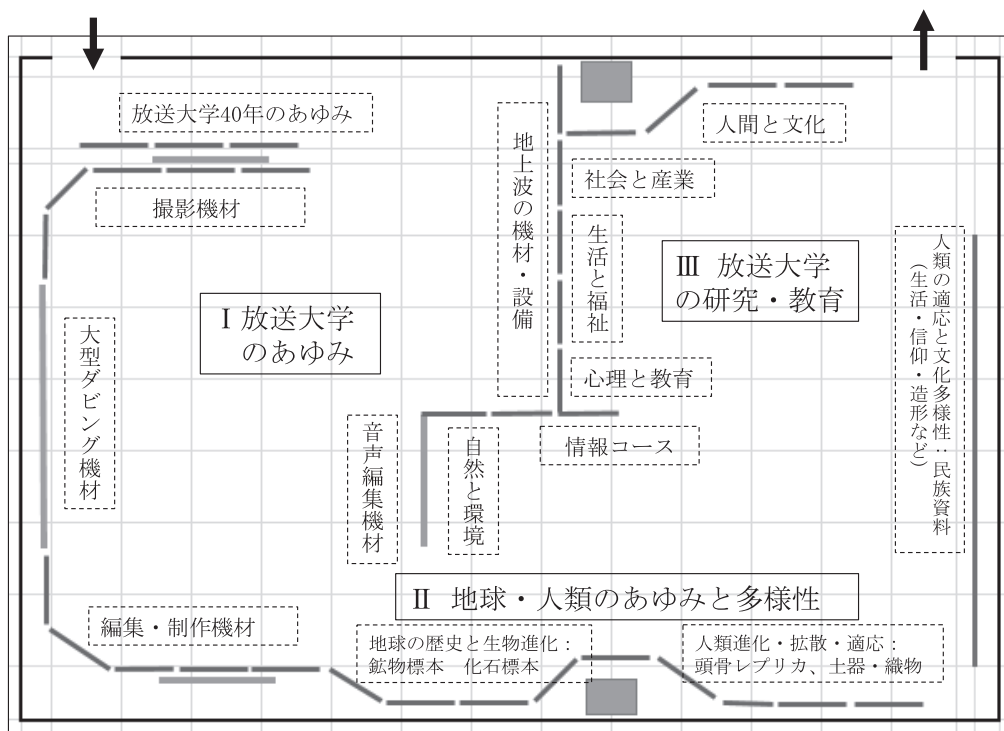


図3 新たなゾーニングと展示コーナー：作成 稲村哲也

5-2 モデル展示の概要と設営の手順

■ゾーンⅠ「放送大学のあゆみ」

このゾーンでは、放送大学の40年近くにわたる歴史に関する資料等を展示する。本学で使用する通信放送機材や撮影編集機材は、デジタル放送の導入に代表されるテレビ放送の変化や、技術的な進歩とともに変化してきた。そうした機材の保存と展示は、本学の歴史を表すことはもちろんのこと、日本の放送史や映像制作の歴史の一端を語ることができる意義深いものとなる。以下はこのゾーンを構成するコーナーである。

①放送大学の40年（導入）

このコーナーは、展示室に入っすぐのパーティション・パネルに設置する年表などが中心となる。ここには、放送大学の黎明期の象徴的な展示物として、「前橋短波放送局」のネームプレートを表示した。

②地上波の機材・設備

放送大学の地上波廃止に伴い、東京タワーや花見川中継所の設備機材や放送大学の関連機材が不要となり、いったん廃棄処分となった。その中で、パラボラ・アンテナを始めとする設備機材の一部が、來生新前学長らの機転によってレスキューされ、放送大学博物館にとって重要なコレクションの一つとなった（写

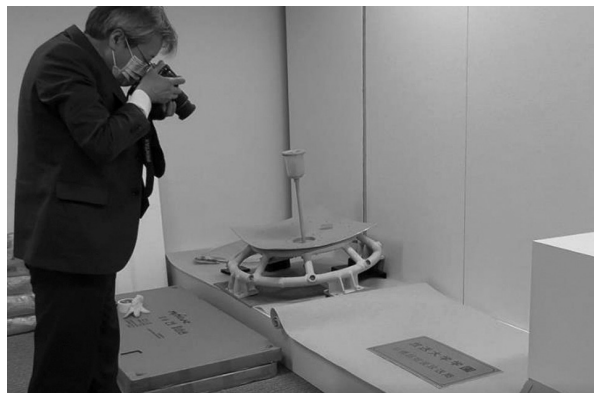


写真8 地上波関連コレクションの撮影（近藤）



写真9 重量展示台の組み立て（五藤）

真8）。そのコレクションをゾーンⅠの導入の後の最初のコーナーに展示することにした。

このコーナーの展示台としては、当初、市販の木製展示台（90cm角・高さ15cm）を想定したが、機材がかなり重く、木製展示台では重量に耐えられないことがわかった。そこで、頑丈な展示台をネットで探したところ、比較的安価な金属製の重量展示台（120cm角・高さ30cm）が見つかり、それに変更した。これらの展示台は、組立がやや難しかったが、電動ドライバーを使い、五藤、鶴見、稲村でなんとか組み立てることができた（写真9）。金属の硬質感を和らげるため、展示台の上部表面に市販の合成絨毯（ベージュ）を敷くことにした。また、小型の重量展示台も購入し、それらを重ねることで変化を持たせることができた（写真10）。さらに、これらの展示台の隣に、放送機材のラックを置き、そこに機材を組んで元の形を再現することにした。

③科目制作・撮影機材

「自然と環境コース」の実験室の古い機材等を点検する過程で、古い手書きの台本が見つかった。このような資料は、使用後に廃棄されがちであるが、博物館



写真10 地上波関連コレクションの展示



写真11 台本と小型機材等の展示

の資料としては重要である。また、制作部の各所から以前使っていた様々な撮影機材が収集できた。無線のヘッドフォン・マイクなどの小型の機材を展示するためには、ケースが必要となった（写真11）。これは、単品の展示に適した行灯型ではなく、平置きガラス・ケースが適している。これもネットで、適切な組み立て式木製ケースが見つかった（写真12）。

④大型機材

制作棟の旧スタジオ副調整室に大型のコンバーターが保管されていた。16ミリフィルムをビデオ映像に変換するためのフィルムプロジェクターと、スライド（静止画）をアナログ映像に変換するための装置をひとつにまとめたダビング装置である。現在も使用は可能だが、もう長年使われていない。日本に何台残されているか、という貴重なものである。そこで、この機



写真 12 木製ガラス・ケースの組み立て（鶴見、五藤）



写真 13 大型機材の設置

材をゾーンⅠ「放送大学のあゆみ」の目玉展示にしたいと考えた。これは重量がおそらく数百キロもあり、鋼鉄の台座の上にT字型に組まれている。これは、業者に依頼し、3部分と台座に解体した上で、展示コーナーに移動して組み立ててもらい、立派な展示物として収まった（写真13）。

⑤映像編集機材

放送大学の時代的変遷を端的に表すのが、映像録画再生・編集機材であった。旧スタジオ副調整室で、次々と更新された各種のアナログ及びデジタルの編集機材が見つかった。これらも放っておけば廃棄される運命にあった。

その一例が、D3-VTR、1/2インチのカセットテープ用のレコーダである（写真14）。パナソニックとNHKが共同開発し、放送大学には平成7年頃から導入された。NHKと放送大学のみが使用していた貴重な機材である。技術部門のスタッフによると、非常に高価だったが、当時としては高性能を誇る機材だったという。これは後継のD5-VTRが導入される平成15年頃まで使用された。

これらの機材の展示には、市販のキューブ型の木製展示台（60cm角）等を使用し、できるだけ時間軸にそって機材を展示し、その変遷を表すことにした（写真15）。



写真 14 録画再生・編集機材 D3-VTR



写真 15 編集機材の設置（五藤、新井明徳ディレクター）

⑥音声編集機材

同じく制作棟の旧スタジオ副調整室で、いくつかの旧式の音声編集機材が見つかった。それらのいくつかはキャスター付きの機材であったため、展示台を使わずにパーティションの前に展示した（写真16）。

■ゾーンⅡ「地球・人類のあゆみと多様性」

①地球の歴史と生物進化（鉱物標本・化石標本）

ゾーンⅡの最初のコーナーは地球の歴史と生物進化であるが、地球科学の専門家である大森聡一准教授に、展示プランと展示物の選別をお願いした（写真17）。「きれい」「珍しい」といった標本の展示ではなく、人類を生むにいたる地球の進化を、関連する標本でストーリーを持って示すのが目的である。特に、岩石・鉱物標本では、地球が生命の惑星となるための鍵となった物質を選別し、他の地球型惑星との対比も含めて解説を加えた（図4）。

この展示には、「兼高かおる基金」提供のガラス・ケース（以下では、単にガラス・ケースとする）が大いに役立った。「兼高かおる旅の資料館」でアクセサ

リー等を展示していたガラス・ケース内の「雛壇」に、鉱石標本や化石標本の展示をちょうどよく収めることができた（写真18）。

②人類の進化・拡散・適応（頭骨レプリカ、古代アンデスの土器・石彫・織物）

このコーナーは「人類進化」と「古代文明」で構成



写真17 鉱物・化石標本の展示（大森准教授、稲村）



写真16 音声編集機材



写真18 ガラス・ケースに収まった鉱物・化石標本

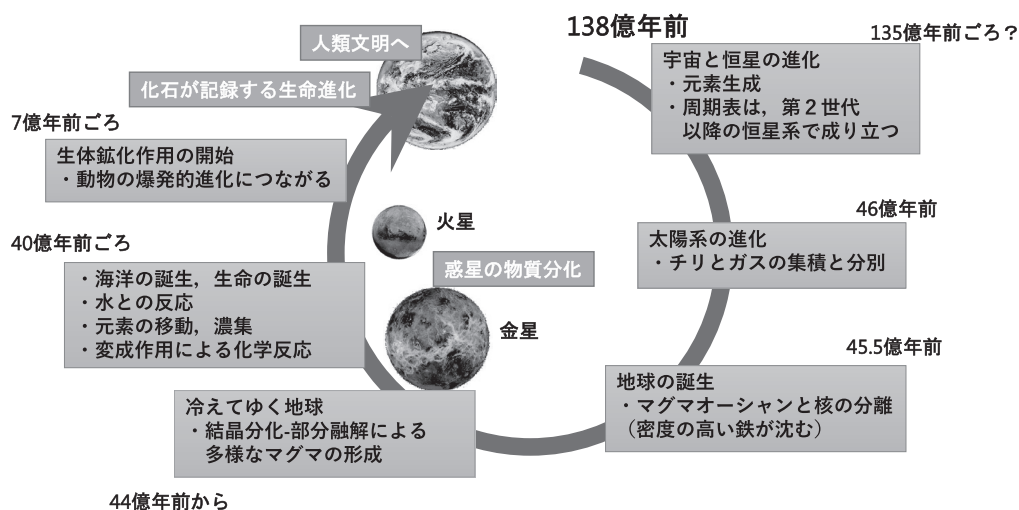


図4 宇宙における岩石の多様化（作成：大森聡一）

することを想定した。展示品としては、愛知万博の南アフリカ館で展示されていた猿人（アウストラロピテクス）の頭骨レプリカなどがあった（写真19：右端）。「人類進化」の展示のためには、最低限、原人と旧人の頭骨レプリカが必要であったが、鶴見が所属する東京大学総合研究博物館の所蔵する標本レプリカで補うことにした（写真19：中央が原人、左が旧人）。「古代文明」については、アンデスの古代裂がすでにあったが、鶴見の提案によって東京大学総合研究博物館の所蔵品から石彫の模型と土器を加え、古代美術の多様性を表現することにした。それらの土器はテグス等で固定した（写真20）。これらの資料の展示には、ガラス・ケースが不可欠であったが、兼高かおる基金から提供していただいた行灯型ケースを用いた。

③人類の適応と多様性（民族資料）

人類の進化と古代文明の後に、人類文化の多様性を表現するのがこのコーナーである。展示としては、最後のコーナーに相応しく、見栄えも華やかとなる（巻末カラー③）。ここでは、木製のキューブ型展示台と平台等を組み合わせて、高さの変化をもたせた。その高さを自然環境の高さに模して、高い部分に、アンデスとヒマラヤの高地の文化を展示し（写真21）、低い

場所は、アフリカ、西アジア、東・中央アジア（中国・モンゴル）、アマゾン、オセアニアの展示を配した（写真22）。

■ゾーンⅢ「放送大学の研究・教育」

①自然と環境コース

ここでは、安池智一教授の協力により、分子構造を知るための光学実験機材と分子模型をガラス・ケースに展示した（写真23）。また、生物系研究の展示として、顕微鏡とPCR装置を展示した。



写真21 アンデス・ヒマラヤ高地の展示



写真19 化石頭骨レプリカ



写真22 モンゴル、西アジア、アフリカの展示



写真20 土器の展示（鶴見）



写真23 分子模型の展示をする安池教授（中央）



写真 24 恐竜の標本

②情報コース

情報コースの展示としては、近藤（本稿共著者）が所蔵する始祖鳥のレプリカと恐竜の骨格レプリカを展示した（写真24）。恐竜はミクスト・リアリティという展示手法のためのものである。この資料は、後に、ゾーンⅡに統合し、地球の歴史（生物進化）の展示の中に位置付けることとした。

2021年10月現在では、以上の2コースの展示が設営された。後に、心理と教育コースから、心理実験の器具、箱庭療法の関連資料、佐藤仁美准教授らによるグアテマラのマヤ系先住民の現地調査に関連する資料、社会と産業コースから河合明宣名誉教授らによるブータンとの連携事業に関わる資料等の提供があった。

6 博物館展示の活用と連携―「兼高かおる世界の旅」リメイク番組の制作をめぐる

6-1 兼高かおる旅の資料館・兼高かおる基金との連携

2020年度の後半、大村敬一教授の大学院生のひとりが「兼高かおる基金」の理事の夫人であったことから、彼女に放送大学の博物館についての情報が伝わり、「兼高かおる旅の資料館」の閉館とその膨大な民族資料コレクションが話題となった。

そこで筆者稲村は、現地に赴き、基金の理事の方と相談をした。その中で、コレクションの寄贈先を探しているという説明を受けた。放送大学での受け入れについての話題もしたが、放送大学ではまだ博物館が無いので、受け入れは難しいと回答した。また、国立民族学博物館との話し合いも進んでいるとのことであり、そちらでの引き取りが適切であろうという助言もした。

そうした過程で出てきたのが、次に述べる番組映像の再活用による「放送大学キャンパスex」の番組制作である。

6-2 「兼高かおる世界の旅」リメイク番組の制作

「兼高かおる基金」の理事の方々との協議の過程で、「兼高かおる世界の旅」の番組映像がフィルムの状態で保管しており、それを再び世に出せないか、という希望が出た。「兼高かおる世界の旅」は、1959年から1990年まで続き、日本人に世界への関心と知識を大きく広げたものである（写真25、26）。1954年からの米国留学を経た兼高かおるが、先進的な知的好奇心をもって企画し、世界の民族文化、考古遺跡、史跡、自然環境などの学術的にも貴重な映像を多く遺している（兼高1985、2019）。

筆者は、かねてから、人類史・考古学・民族誌などのジャンルの学術的な映像が、国立民族学博物館などに蓄積されており、それらの再活用が放送大学の「キャンパスex」の番組制作にとって有望であると考えていた。「兼高かおる世界の旅」の番組の再活用は、その延長上で、極めて意義深いと思えた。というのも、筆者自身が子供のころからこの番組をよく見ており、多様な世界への関心を開いてくれたものだったからである。周囲の人たちに聞いてみても、同番組には根強いファンが多く、「キャンパスex」チャンネルの知名度・視聴率の向上にも資すると思われた。

世界の諸民族の暮らしと文化は急激に変化してい



写真 25 南極取材（写真提供 兼高かおる基金）



写真 26 番組制作（写真提供 兼高かおる基金）

る。そのため、数十年前の現地映像は希少価値が高い。また、考古遺跡も、発掘調査の進展の一方で、観光化に伴う遺跡公園整備等による遺跡復元やアクセス制限などが進み、過去の映像の希少性が増している。

基金の理事の方々によれば、1971年以降の映像に関しては著作権が基金に属しているという。番組のリスト・概要を見たところ、民族・考古などの貴重な映像が多く、当該地域の専門家との対談等により、興味深いメイキング番組が制作できると確信できた。映像は各23分程度で、それに解説をつけて45分番組とすることが想定された。

基金の所蔵フィルムは約1000本に及ぶというが、学術的、社会・文化的な価値で判断しても、そのうち200～300本のセレクトが可能と思われた。映像はフィルムで保存されているため、こちらが選別した番組を基金がデジタル化し、制作にあたって映像の使用料を支払うという方法とることになった。

学術的価値を高め、放送大学の主体性を確保するため、その中から特に学術的文化的な価値のあるものを選別し、独自の画像・映像を加えて専門家の解説を付す企画とした。すなわち、希少映像を再活用し、現代の画像・映像と学術的知見を付加し、その組み合わせの相乗効果により、学術的な関心と価値を大幅に高めると共に、広く一般の視聴者の興味関心を沸き立たせる内容を目指すこととした。海外ロケ等が困難な現状において、貴重な映像の活用は大きな意義があり、また、「キャンパスex」の知名度・視聴率の向上に資するものと考えた。以上の観点から企画をたて、2021年度の生涯学習支援番組委員会に提案し採択された。

6-3 番組の内容

2021年度の企画は最初の試みとなるため、特に学術的に重要な映像を選別し、南米ペルーを取り上げることにした。なお、2021年はペルー独立200周年に当たる重要な節目であり、注目度が高いと考えた。

タイトルについては、大塚制作部長と相談の上、シリーズ・タイトルは『考古・歴史・文化の今昔～蘇る「兼高かおる世界の旅」と共に～』、番組タイトルは、第1回が「ペルー編① 古代アンデス文明と博物館」、第2回が「ペルー編② インカ帝国・征服～独立～現在」と決まった（巻末カラー④）。

第1回では、ペルーの遺跡（ナスカ）と考古学博物館を取り上げた「ペルーの謎と宝」の映像を活用し、古代アンデス文明の大御所である大貫良夫氏（元東大アンデス調査団団長）に解説していただくこととした。内容としては、古代アンデス文明の概説、東京大学の調査団による発掘と研究、また、東京大学によるアンデス研究のきっかけとなった（ペルー天野博物館設立を含む）天野芳太郎氏の足跡と功績などである。また、多くの関連画像があるので、それらを提供していただいた。また、大貫氏の弟子にあたる坂井正人氏（山形大学教授）らによる最新のナスカ遺跡研究についても解説していただいた。

第2回では、ペルーの史跡や文化を紹介した2つの番組「ペルー今むかし」及び「覇者ピサロの町」の映像を活用し、ペルーの歴史・文化（インカ帝国、スペイン征服、植民地、インカの末裔・先住民の文化とメスティーソの文化）の概要について紹介する企画とした。この回では、兼高氏のペルー大統領訪問に関連して、日系人アルベルト・フジモリ氏の大統領就任の経緯や任期中の出来事についても解説した。

この番組制作には、これまでの博物館活動が大いに役立った。そもそも、ペルー天野博物館（現天野織物博物館）との関係は、本稿の2章でその概要を述べた通りである。

7 おわりに

本稿では、アウトリーチ展示会の内容を概説すると共に、2020年度の学習教育戦略研究所による課題研究「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」による、モデル展示の構想、展示の実践を論じた。それによって、放送大学博物館の設立の大きな可能性を明らかにし、また展示作業の過程を記録すると共に、展示の実際のイメージ、設立の意義等について論じた。本稿ではまた、日本展示学会の展示論講座の放送大学での開催についても報告した。この事業の経験も、放送大学博物館設立の意義を確信させる大きな動機付けとなった。こうしたアウトリーチ展示や展示論講座の実践を通じて、多くの博物館や学会との連携が強化された。

放送大学博物館の準備段階から、博物館等との連携の具体的なメリットが具体化した。その好例が、「キャンパスex」の番組の制作につながった「兼高かおる旅の資料館」（兼高かおる基金）との連携であった。兼高かおる基金からは、ガラス・ケースのほか、資料館で展示した写真パネル、さらに兼高かおるが初期に使用した撮影用カメラを提供していただいた（巻末カラー⑤）。それは、博物館の企画展のモデル展示として活用し、また番組のなかで活用することができた。

モデル展示は、未完成段階ではあるが、「キャンパスex」の番組で、PR版のロケの背景として活用したり、展示物をスタジオで活用するなど、さまざまな形で活用が現実化している。さらに、2022年度テレビ科目『人文地理学』の収録にも活用された（巻末カラー⑥）。

放送大学博物館の設立によって、その場を利用した番組制作など、今後さまざまな教育や広報のための活用のメリットが考えられる。本稿がそのための一助となれば幸いである。

謝辞

本稿の一部は、学習教育戦略研究所の課題研究：2019年度「放送大学博物館構想・『博物館実習』構想のための基礎的研究」、2020年度「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」（いずれも代表・稲村哲也）、また、放送大学教育振興会助成金：2019年度「博物館活用による遠隔教育の教材および教育システムの開発」、2020年度「博物館と連携した遠隔教育システムの確立に向けた拠点形成」（いずれも代表・稲村哲也）、及び、2021年度科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）「遊牧・山岳・先住民地域におけるリモート教育のモデル構築に関する実践的研究」（課題番号：21K18122、代表・稲村哲也）の成果である。放送大学博物館の設立に向けたモデル展示の設営事業には、上記の助成に加え、「兼高かおる基金」から多大なる協力を得た。記して謝意を表したい。

参考文献

- 天野芳太郎1983『わが囚われの記—第二次世界大戦と中南米移民』中公文庫
 天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会1998『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会
 稲村哲也2016a「古代アンデス文明と日本人—放送大学特別講義と展示会」『放送大学研究年報』33：79-93

- 稲村哲也2016b「大学博物館の展示とその役割—国立大学と私立大学」稲村哲也（編）『博物館展示論』放送大学教育振興会
 稲村哲也2021「放送大学博物館の可能性と意義：展示会開催の蓄積および博物館設立に向けた調査を通じて」『放送大学研究年報』38：95-115
 大貫良夫1992『黄金郷伝説』講談社現代新書
 大貫良夫・加藤泰建・関雄二2010『古代アンデス 神殿から始まる文明』朝日新聞出版
 尾塩尚1984『天界航路—天野芳太郎とその時代』筑摩書房
 兼高かおる1985『兼高かおる旅のアルバム』講談社
 兼高かおる2019『新装版 世界とびある記』ビジネス社
 小池道夫1998「天野先生との奇しき縁」天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会、62-67頁
 福中又次1940『インカ帝国と日本人』国際文化研究協会（東京渋谷区原宿）
 森下精一伝編集委員会1980『森下精一伝』中央公論事業出版
 野内セサル良郎・稲村哲也2017「『マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明』展の開催」『放送大学研究年報』34：27-37
 野内セサル良郎・稲村哲也（編）2016『世界遺産マチュピチュに村を創った日本人 「野内与吉」物語・古代アンデス文明の魅力』新紀元社
 西野嘉章・鶴見英成（編）2015『黄金郷を彷徨う—アンデス考古学の半世紀』東京大学出版会

（2021年11月4日受理）



巻末カラー① 博物館展示論講座のスタジオ見学



巻末カラー④ ex 番組『考古・歴史・文化の今昔～蘇る「兼高かおる世界の旅」と共に～」の収録



巻末カラー② 岩永学長・菊川副学長・隅部副学長（後方）の視察



巻末カラー⑤ 兼高かおるが初期に使用したムービー・カメラ



巻末カラー③ 世界の多様な文化とアンデス文明の展示



巻末カラー⑥ テレビ科目『人文地理学'22』の収録：池谷明子氏（横浜国立大学准教授、左）及び深谷岬氏（京都外国語大学大学院生、右）